

海外教育施設に派遣を希望する教員のための研修会

平成20年11月15日（土）岡山県国際交流センターで上記の会が開かれました。

趣旨は、日本人学校などに派遣を希望する教員に、派遣されて帰国したばかりの教員などからの情報を伝えることで、世界に飛び出すきっかけにもらい、岡山県の国際理解教育や本研究会の裾野を広げようとするものです。



この会の担当で司会をしているのは、岡山市立西小学校の池田清美先生です。15年ほど前にシンガポール日本人学校に赴任していました。帰国後は、本会事務局長をしたり、岡山大学附属小学校に社会科の専門家として勤められたりしています。コメントが的確で語り口が優しいと評判の先生です。



続いて、岡山県国際理解教育研究会を代表して、岡山市立芥子山小学校の服部誠教頭があいさつをしました。やはり、15年ほど前にジャカルタ日本人学校に赴任していました。帰国後は、岡山市教育委員会の国際理解教育の専門家として勤められました。軽妙な語り口で、場の雰囲気や和らげ、盛り上げてくれます。この日はこの後、岡山市陸上記録会に向かわれました。

さて、開会行事が終わると、今日の講師の生野康一先生による講話です。生野先生は、全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会の会長です。25年ほど前にパキスタンのカラチ日本人学校に赴任され、10年ほど前には、デトロイト補習校にも赴任された経験をもたれています。講話の題目は「派遣教員の課題と現状」ということでした。生野先生は、今年の文部科学省の最終面接にも立ちあわれたり、派遣前研修の講師をされたり、各県の国際理解教育研究会の行事や研究会にも来賓として招かれたりしています。もちろん、海外視察に出られたり、すぐにお忙しい中での講師としての来岡になります。穏やかな語り口で、この仕事のもつ魅力や心構えを、最新の情報とともに話ししてくださいました。それでは、簡単にお話を伝えましょう。



まず、現在海外にいる小中学生は約6万人です。それが、3分の1ずつ、日本人学校と補習校と現地校とに通っています。日本人学校は、世界に80余りあります。補習校は約200あり、100人以上の児童生徒に1人、400以上に2人、800人以上に3人の教員が派遣されます。補習校は、土曜日に現地校の校舎を借りて、国語と算数を教えている学校がほとんどです。



派遣教員の数は、管理職を含めて毎年420人ほどで、毎年女性の割合が増え、今では100人を超えるほどです。ただし、補習校への派遣は、今までのところは女性がいません。派遣教員の内、半数は即派遣といって、1月に合格が知らされ、派遣国が決まったら、その年の4月、つまり新学期から派遣となります。残りの半数は1年間名簿登録となります。

さて、最近の実状は、景気低迷によって、日本人学校の児童生徒数は減少傾向にあります。30人以下の小規模校が30あります。また、2000人を超えるマンモス校はどうでしょう？バンコク・上海が巨大校です。シンガポールやロンドンなどが次に続きます。

次に、どんな人に海外教育施設に行ってもらいたいかということです。それは、免許外の教科や校種を教える場合もあるので、たとえ上手でなくても、子ども達のために一生懸命やろうとする教員です。全国から派遣された教員とつながりながら、自分のクラスだけではなく、全部の子ども達と、兄弟や家族のように関わることができる教員です。誰一人として、希望して海外に出ている子どもはいません。友達と別れて、知らないところへ行くハッピーでない子どもを、日本人学校に来て良かったと楽しくするような仕事にしてほしいのです。また、自分が住んだ国をほとんど知らずに、日本ばかりを向いて3~4年を過ごす子ども達もたくさんいます。大きくなってその国とつながっていったり、世界に羽ばたく人になったりできるように、治安が悪い場合は子ども達を守りながらも、現地理解を進めていただきたいものです。

最後に、面接では志望動機を必ず聞かれます。この会のような勉強を続け、海外の教育事情をしっかりと勉強して、受験していただきたいものです。また、岡山県の国際理解教育研究会に入って、スタッフとして支えていただきたいと思います。がんばってください。

続いて、海外派遣の実状と題して、3月に帰国したばかりのお2人が、日本人学校の体験を話されました。

まず最初は、南米コロンビアのボゴタ日本人学校に派遣されていた、鏡野町立大野小学校の日笠公則先生です。

私は、1月に校長からボゴタに決まったと聞かされて、とてもびっくりしました。それ



は、その時に6才・4才・1才の3人の小さい子どもがいたからです。調べれば調べるほど、治安が悪い大変な国だと思われました。即派遣ですぐに返事が必要でしたが悩みました。結局、妻の「行けばいいが。」という言葉で心が決まりました。

さて、コロンビアの簡単な紹介をします。国土は日本の3倍。赤道が南部を横断し、アンデス山脈が北西部を走っています。首都のボゴタは人口が約650万人。大山よりも高い標高2650mの高地にあるため、年間平均気温14℃と常春の都です。山の天気と同じように、1日中天候が安定することではなく、気温差も大きいです。人々は、混血の割合が多く、ほとんどがカトリック教徒です。公用語はスペイン語になります。コーヒーや切り花（バラ・カーネーション）や金やエメラルドなどが有名ですが、貧富の差が大きく、殺人や誘拐の発生率が大変高いのも有名です。

次に、日本人学校のことを発表します。私は、体育が専門ですが、音楽も教えることになりました。運動会は、日本人会がそろって盛り上がります。フォークダンスを楽しく踊ったり、パン食い競争に夢中になったりしました。私は子ども達に岡山の「うらじゃ」を教えました。水泳は、プールがないため、警察の上層部が使う温水プールを3日間だけ借りて行いました。現地校の交流は、治安が悪いためコロンビアの学校とはできず、イギリス人学校と行っていました。学校の特色としては、スペイン語の授業や、民族音楽（フォルクローレ）の授業、コロンビア学習、和太鼓の演奏などがあります。また、避難訓練では、バスジャックやゲリラ侵入に対する訓練をしました。

それから、生活のことについてですが、住居は4階建て以上のアパートで、防爆シールに覆われています。メイドさんや警備員の人とのふれあいがありました。外出は、子どもの誘拐が多いため（臓器売買に使われる）必ず手をつなぎます。家にこもりっきりの生活になるため、会員制のスポーツクラブに入ったり、警官やボランティア学生に守ってもらって外出を楽しんだりしました。

最後に、赴任したら早く現地に慣れること、そのために、しっかり言葉を覚えること、安全第一で注意を怠らないことをお伝えし、子どもがコロンビアに帰りたいたいというほど、住めば都になることをお伝えして終わりとします。



次の発表者は、中国の上海日本人学校に派遣されていた、岡山市立桑田中学校の川元彰先生です。

私は、まず派遣決定までの流れをお話しましょう。まず、勤務校の校長に派遣を希望することを伝えます。志願書を提出すると、県の教育委員会による面接がありました。動機や家族のことを聞かれました。最後は、文部科学省によ

る面接が大阪でありました。これは、個人面接と集団による討論がありました。以前に不合格だったため今年もだめだろうと忘れかけていた1月の初めに、校長から上海に即派遣で決定したと知らせがありました。1月末に9日間の研修が、東京国立オリンピックセンターでありました。2月中旬には配偶者1日研修というのもありました。4月6日に東京で辞令交付式があり、7日に上海に空路入りしました。

さて、次は上海についてです。街を少し歩いてだけで、貧富の差をはっきりと感じます。超高層ビルの下にバラックの貧しい家が建っています。物価の安さにも驚きます。アサヒスーパードライが50円余りで買えます。屋台がたくさん出ていますが、生水には要注意です。すぐに激しい下痢を起こします。交通マナーの違いにも驚かされます。歩行者優先なんて通用しません。我先にという感じです。人々は、歴史と伝統を重んじ、国をあげて行事を祝います。また、子ども好きで体の不自由な人にも格別優しいです。

次に、日本人学校のことです。約2500人の児童生徒で世界一です。そのため、学校が2つのキャンパスに分かれています。現地の学校との文化・スポーツ交流を盛んに行っていました。中国の学校は、運動は社会体育でしています。ですから、その交流はクラブのような団体と行いました。そして、バスケットボールや、バドミントンは屋外で行っていました。体育館では国民的スポーツの卓球と、吹奏楽が活動していました。交流に行ったときは、最大限の歓迎を受けます。ファンファーレ、横断幕、花道といったぐあいです。女子中学生は、感激して別れの際には抱き合ったり泣いたりしていました。中国の学校は、日本と違って、学習するところで、遊んだり集団生活を学んだりするのは別の場所ということでした。

最後に、私は赴任前に、中国というと下に見るような偏見がありました。マナーや衛生面では確かに問題もありますが、世界を引っ張るパワーや生きる強さには驚きました。この経験を日本での教育活動に生かしていこうと思っています。

この後、参加者から質問が出され、生野会長や日笠先生と川元先生が回答されました。例えば、一時帰国のことで、「教材を日本で調達し、必要なものを揃えるのには役立ったが、長旅なので反対に体調が崩れた」とか研修中の在任校での扱いのことで、「正式には4月の人事異動なので公にしにくく、各学校の実態によって出張の名目が異なる」などです。昨年の参加者を上回る20人（男性10人・女性10人）も海外派遣の希望を、より強くされたのではないのでしょうか。



報告者

編集部

三好 隆志